

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

Synchronic and Diachronic Aspects of Locative Inversion and Negative Inversion in English (英語における場所句倒置と否定倒置の共時的通時的諸相)

氏 名

小池 晃次

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、生成文法の現行の理論であるミニマリストプログラムの枠組みの下、英語における場所句倒置構文と否定倒置構文の共時的通時的諸相を調査する。

1章では、以下の章全てに渡って採用される2つの理論的な考えを実装する。ひとつは Chomsky (2004, 2008, 2013 等)におけるフェイズに基づく派生モデルであり、この考えの下では、統語構造はフェイズを単位として構築され、フェイズ主要部の補部が循環的に音韻部門と意味部門へ転送される。もうひとつは Rizzi (1997, 2001, 2004 等)における分離 CP 仮説であり、この仮説の下では、CP 領域はいくつかの別個の機能投射に分解される。そして、これら2つの考えが概念的な動機づけに加えて経験的な証拠によって正当化されることを示す。

2章では、現代英語における場所句倒置構文を非対格動詞を伴うタイプと非能格動詞を伴うタイプに二分しながら、それらにフェイズに基づく分析を与える。Chomsky (2008)における独立探査の考えを援用しながら、非対格動詞を伴った場所句倒置構文は、TopP フェイズにおいて場所 PP が[Spec, TP]と[Spec, TopP]へ平行的に移動し、主語 DP は[Spec, VP]に留まる派生から生成されると提案する。他方で、非能格動詞を伴った場所句倒置構文は、Culicover and Levine (2001)の分析を修正しながら、TopP フェイズにおいて場所 PP は[Spec, TopP]へ移動し、主語 DP は[Spec, TP]から重名詞句転移を受ける派生から生成されると主張する。それから、これらの提案された派生に基づく分析は2タイプの場所句倒置構文に関する主要な言語事実に原理的な説明を与えることを示す。

3章では、豊かな一致仮説の観点から、英語史における場所句倒置構文の発達を考察する。Nawata (2009)における豊かな一致仮説に基づく分析を拡張しながら、場所句倒置構文の定形動詞は、T と Fin と Top に分配された屈折形態素を収容するため、Fin まで義務的に移動していたと主張する。そして、このように屈折形態素を別個の機能主要部に分配することで、古・中英語における定形動詞の屈折形を正しく派生できる

ことが示される。この一連の考えの下では、動詞屈折に関わる一致素性は、それらが形態的に具現化する限りにおいて、Tとは別個の機能主要部に分配されねばならない。他方で、後期中英語以降、当該の一致素性が次第に形態的に具現化することを止めると、それらはTとは別個の機能主要部に分配される必要はもはやなく、それによってFinやTへの動詞移動の消失が説明される。それから、この動詞移動の衰退に関する説明は、動詞後位の代名詞主語の利用可能性等の歴史的な事実によって経験的に支持されることを示す。

4章では、現代英語における否定倒置構文について循環的な転送を使った分析を提示する。Holmberg (2012)における文否定辞とTの間で形成される極性関係という考えをTanaka (2011)における転送領域単位で進行する意味解釈という考えと組み合わせながら、文否定辞とTは単一の転送領域内に収まっていなければならないと提案する。この提案の下では、FocPフェイズにおいて文否定辞が[Spec, FocP]へ前置されると、TはFocまで主要部移動しなければならず、その結果、主語・助動詞倒置が引き起こされる。この提案に基づく分析は、否定倒置の義務性だけでなく、他のAバー移動との共起制限を含めた否定倒置構文の詳細な特性に率直な説明を与えることを示す。それから、循環的な転送を使った文否定の分析は、文否定辞を文中や文末にもつ倒置していない否定文にまで拡張できることが論証される。これによって、否定倒置構文とその他の否定文の両方をカバーした統一的な説明がもたらされる。

5章では、英語史における否定倒置構文を含めた否定辞で始まる構文の発達を議論する。2タイプの否定辞neがPintzuk (1999)における意味での構造的な競合関係にあったと主張し、それによって後期中英語におけるneで始まる主語・動詞倒置文の消失を説明する。それから、中英語を中心とした否定調和期における否定倒置の欠如はChomsky (1995等)における最終手段の原理を使って説明される。さらに、近代英語以降、否定辞notは構造的な競合を受けて句としてのステータスを失ったのに対して、neverやseldomのような否定副詞は構造的な競合を受けず句としてのステータスを保持してきたと提案する。そして、この提案は、notによって導かれる否定倒置構文が初期近代英語の終わりに消失したのに対して、neverやseldomによって導かれる否定倒置構文が現在まで存続してきたという歴史的な事実によって正当化されることを示す。最後に、文否定辞を文中や文末にもつ否定文についても、文否定辞で始まる構文と同様の仕方で説明されることを論証し、英語史における否定文に関するより完全な記述を提供する。

6節では、本論文全体のまとめを述べる。